

ちよつとワインと旅の無駄話（その二）

ナイアガラの滝

昨年秋、仕事でシカゴ、ニューヨーク、ワシントンそしてサンフランシスコを回ってきた。シカゴでは、情報収集のため、広大な展示会をひたすら歩き回った。数日間、そんなことをやった後、次の目的地のニューヨークに行く途中、ちょうど中間にあるバッファローで降り、ナイアガラの滝に寄った。

知人のNさんがニューヨーク駐在になった時、南米イグアスの滝に行こうと声を掛けられていたのだけれど、その機会を逸^{いっ}してしまった。グズグズしている間に、Nさんは行った。そして「よかったぞ！ やっぱり一度見なくちゃあ」と、いつものようにニツと笑顔で自慢された。

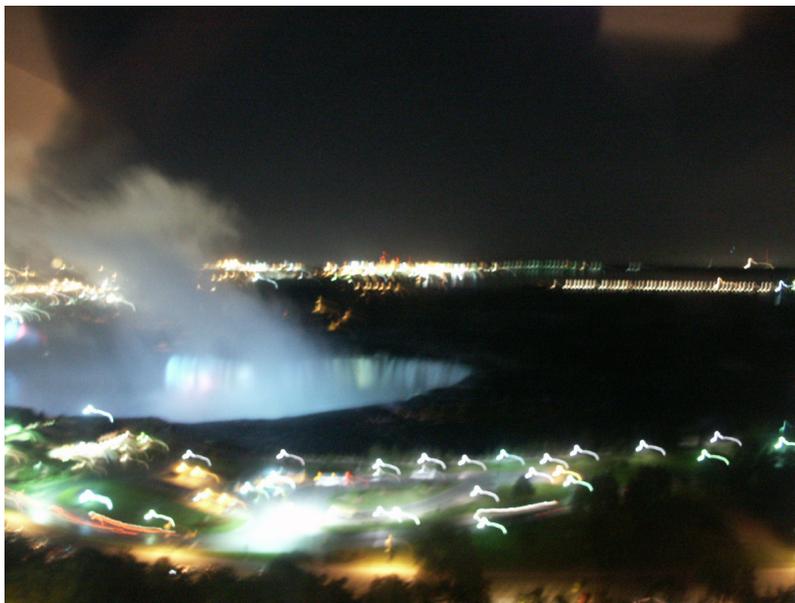


そのリベンジをした
いという気分があった
のだろう。ナイアガラに
立ち寄るのも悪くわな
いという気持ちに襲わ
れた。ナイアガラに行く
のは約三〇年ぶりのこ
とである。

初めてナイアガラを
見たときは、写真から勝
手に夢を膨らませてい
たものだから、やや失望
させられた。

その規模の壮大さには驚かされたけれど、ナイアガラの滝あるエリー湖からオ
ンタリオ湖の境の付近は、人跡未踏の山岳地帯のようなところに違いないと勝手
に思っていたもので戸惑い、言葉を失った。たんなる認識不足だったのだけれど、
近くに建物もたくさんある、平らで見通しが良い場所だったため、ただただ咄然と
した。その記憶だけは今でも昨日の出来事のように鮮明に覚えている。

だから今回は、正直なところ冷やかしか半分だった。あれだけ開発された観光地
なのだから、いくら「お上りさん」と見られようとも、滝の近くのホテル、それ
もカナダ側のホテルに泊まり、何も考えずに、ともかく圧巻だという照明に浮き
上がる滝の姿を拝んでみようかと初めから決めていた。それも一興だろう、と思え



る歳になっている。

ところが、この諦めにも似た気持ちに幸いしたのだろう。落下する膨大な水量
に素直に驚かされた。滝の位置が浸食のため何キロも後退しているとはいっても
の、それが何億年にもわたって続いていることに脱帽した。自然の凄さにただ

感動した。この自然と、人工のイルミネーションとが織りなす夜景は、幻想的な一大ショーである。東京や香港やニューヨークなどの夜景とは質もレベルも格段に違う、まさにナイアガラだけのものだった。

滝壺たきつぼツアーもディスニーランドの冒険の国の比ではない。昔は、そんなものなんか、と馬鹿にしていたけれど、迫力があつた。とても人間の手で作れるような仕掛けではない。揺れるボートめがけて、容赦なく叩き付けてくる水。巻上まきあがりがる風で雨合羽あまがっぱはまったく役に立たない。船上では歓声と悲鳴とが行き交う。その声を受け、操縦士はエンジンを全開にする。勢いに押されて流された船が少しずつ前進し、滝壺に近づく。すると再び歓声と悲鳴が沸き起こる。そんなことを数回



繰り返し、観客をずぶ濡れにするアトラクションを満喫まんきつした。

ナイアガラ半島とカナダ・ワイン

もう一つ、収穫があつた。カナダ側はアメリカとはまったく違う世界であると

いうことを体験したことである。そのまま空港に帰ろうと思っていたら、時間が十分あるから、ちよつと回り道していかないかと運転手兼ガイドが言う。聞けば、近くに歴史を感じさせる古風なたたずまいの街がある。しかも、一帯は「アイスワイン」の名産地だという。

ブドウ園のブドウが霜で全滅した。凍ったブドウではワインは作れない。それが常識だったけれど、諦めきれず、凍ったブドウを絞って得られたごく僅かの果汁を使って、ある農民がワインを作った。それが予想に反して美味しかった。水分が氷結し、果汁の液が濃縮していたためである。それが「アイスワイン」の起源で、ドイツの葡萄園で起こった出来事である。以来、意識的にブドウの収穫を遅らせ、氷結するのを待って、収穫し、ワインを作るようになっていく。しかし、産地はドイツのごく一部、秋から冬にかけ、ブドウが氷結するぐらい寒くなる気候のところに限定され、産量は少なく高価である。芳醇で美味しい。——そんなことをどこかで読んだ記憶があった。

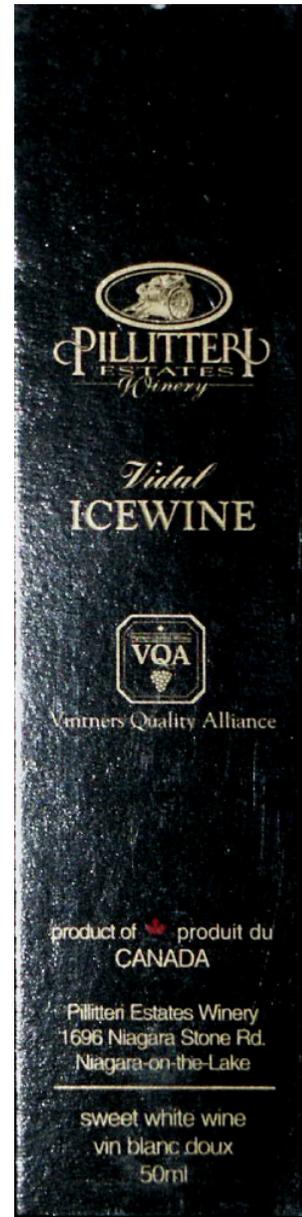
多分、糖分が多く、甘いもので、僕の好みではないだろうとは思っていたものの、まだ口にした経験がないので断定はできない。それで好奇心がうずく。やはり「一飲は百聞にしかず」である。直ちにOKし、そこに向かうことにした。

右手にナイアガラの滝が浸食され、上流のエリー湖側に後退した痕跡を眺めながら、川沿いに下流のオンタリオ湖に向かって進む。彼は一生懸命にナイアガラの地質と歴史を説明する。普通の観光客には、それで十分なのだろうけれど、地学が趣味で、そのメツカの一つ米地質調査所(USGS)まで出かけたことがある僕が相手だったのは気の毒だった。どうも話が変わる。で、道路沿いあったナイアガラの地質と歴史の説明文を読んだ。専門用語がたくさん出てくるので、彼が理解できなかったのも無理はない。やっぱり、間違いだらけだった。

それで、戻ってからも調べれば分かることなので、説明はもう良いから、と

もかく有名なポイントを見て回り、その後は目的のワイナリーと歴史の街に直行するように頼んだ。

川沿いの道を離れる。すると様子は一変した。豊かな農園地帯で、果樹園、ブドウ園に続いてワイナリーも目に入ってきた。ワイナリーに入るかと彼は聞く。しかし、時間が気になるので、傍そばを通るだけで十分、簡単に試飲でき、買えると



ころがあれば寄りたいたと答える。了解しましたと言う言葉でワイナリーが経営する店に入った。見てみると、日本人にはとくに愛想が良い。お客さんなのだろう。いろいろ話しかけてくる。面倒なので、早速、試飲に入った。

これが一番売れているとか、日本で買えばいくらするからお買い得だとか必死で説明する。それを適当にやり過ぎし、試飲に専念する。芳醇というより濃厚。ワインというより甘いブランデーのようである。胸一杯に吸い込むだけで、クラクラする官能的な強い香りである。一呼吸を置かざるを得ない。それから、おもむろに口に含んだ。濃厚な甘い液体が口と舌に絡みついて刺激し、五感を占領する勢いで全身に拡散する。ブランデーと「ポルト」のグラスを一緒に流し込んだような気分である。

僕の様子を見ながら、相手はグラスを変え、「そじゃあ、これはどうだ」というように別のものを出した。ややドライである。それも飲み干すと、また別のものを出す。きりが無い。いずれも決してまずくはないけれど、残念ながら僕の好みではない。食後のデザートに楽しむのには向いているけれど、甘いものを口にしなくなっている僕には無縁のものである。

「アイスワイン」と言っても、普通に楽しめるワインを期待していたもので、正直言って、少しがっかりさせられた。いろいろ勧められたけれど、一番小さいヤツを数本、「話の種」に買うのが精一杯だった。そこに日本人の観光客一行が

ドヤドヤと入ってきて、手当たり次第に買い始めた。これを機会に、買い物ツアーから逃れ、店を後にする。歴史の街を眺めに行くぞと気を取り直した。

ところが車が動き出した途端、運転兼ガイドの彼が「これから行くところは日本の女性には人気のところなんです」と切り出した。これには参った。

「エエ——」。オイ、なんだよう。

そんなところなのかよう」と思わず口に出そうになったところ、「夏休みなんかは大変です。でも、いまは日本人の観光客が少なく、ゆつくりできるでしょう」と続ける。胸をなで下ろし、窓の外風景を楽しむことに決めた。



農園地帯を抜けけると、突然、瀟洒しょうしやな街並みに入る。目的地の「ナイアガラ・オン・ザ・レイク」という街である。ナイアガラの滝を落下した水がオンタリオ湖に流れ込む河口にある。英国植民地時代の一七九一年、オンタリオ州の最初の首都になった街で、一九世紀のビクトリア調の建物が残る、約二〇〇メートルの街並みが見どころだという。

第一次世界大戦の戦没者を悼いたんで立てられた「時計塔」がランドマークとなつ



みだから、付近で待つよう頼み、

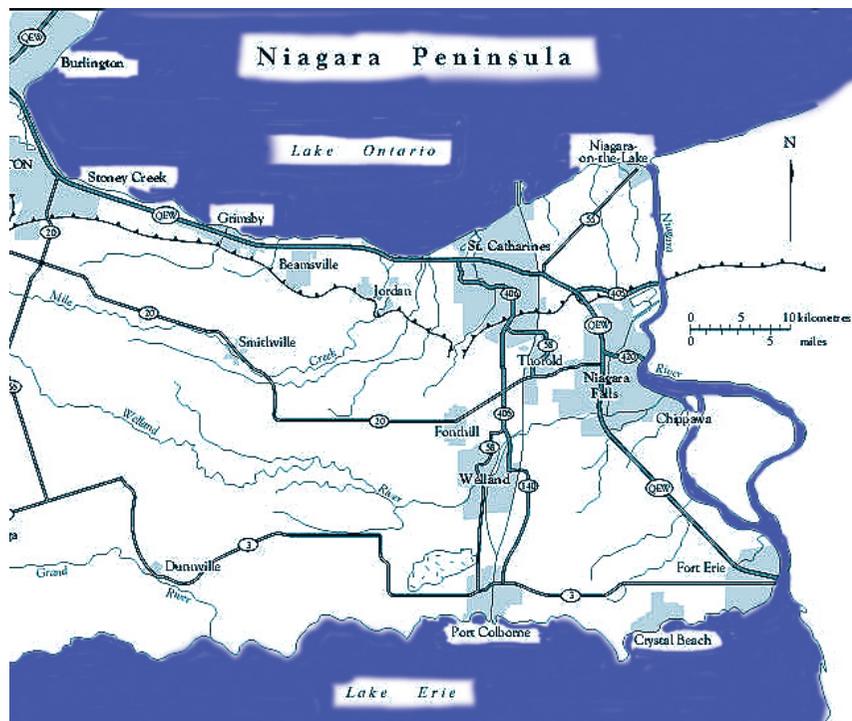
扱う店が軒を並べ、まるで「軽
使ったジャムを扱う「Greaves」

「Just Christmas」などが有名だ
この街をモデルにしたという。

嬉しそうに歩いていた。洋の東
は好きなのかと改めて感心する。

クリームを舐めなめ、ポケット――

上げてきた。バードウォッチング
しい。勝手に想像が膨らみ、飽き
ることがない。でも時間が気
掛かりなので、空いているレ
ストラランに飛び込んでサンド
イッチを食べ、この奇妙な街
を後にした。



余談だが、そして再認識したことだけれど、この「ナイアガラ・オン・ザ・レイク」やナイアガラの滝のカナダ側の一帯は「ナイアガラ半島」と呼ばれていた。地図にも、そう書かれていた。

たしかにカナダ側から見れば、ナイアガラ川で切断されている、エリー湖とオンタリオ湖との間の地域は、上の地図で明らかに通りに、「半島」とあると言えなくはない。僕にすれば、一つの発見だった。それだけで満足感のようなものを覚えた。

(つづく)

二〇〇三年春 伴 友貴